

平成 22 年度卒業研究

対象関係と依頼表現の関係性

担当教員  
千葉 浩彦先生

総合福祉学部 実践心理学科  
学生証番号 A73117 番  
氏名 常盤 瞳

# 目次

序論	1
第一章 背景	
1-1 対人関係の定義	2
1-2 対象関係尺度（青年期用）	3
1-3 依頼とは	4
1-4 五つの影響手段	5
第二章 先行研究	6
第三章 調査	7
第四章 結果	8
4-1 相関分析	9
4-2 重回帰分析	12
第五章 考察	14
結論	16
謝辞	17
要約	18
文献	19

資料

## 序論

依頼とは日常的にだれもが行うものである。しかし他者に依頼を働きかけることが苦手な人、逆によく依頼をする人と、依頼の頻度・仕方はさまざまである。本研究では、そこに人の傾向を対象関係尺度に当てはめ、依頼表現との関係性を検討することを目的とする。第1章では対人関係と依頼の側面について述べている。

第2章では依頼表現に関する岡本（1989）、中村ら（2004）の先行研究を挙げている。

第3章では本調査の目的、調査方法、質問紙の構成を説明する。得られたデータを相関分析と重回帰分析を行い、その分析結果を第4章に示した。

第5章で考察を述べている。

## 第一章 背景

### 1-1 対人関係の定義

人間は、1人では生活できないほどに、まわりの人びとや集団に依存して生活している。社会生活において、個々人は相互に刺激となり反応を返し合うことを繰り返す。このような相互作用を経て、個々人間にある程度持続性をもつ心理的な結びつきが形成される。このような個人対個人の心理的な結びつきを対人関係（interpersonal relations）と呼んでいる。個人対個人の心理的な関係は、一方の個人からみたときに相手に対する対人態度と言い換えることができる。対人態度とは、相手に対する好悪や愛憎などの感情、相手の特徴について形成している印象や認知、相手に接近したり相手を回避したりしようとする行為傾向から成り立っている。特定の相手に対する対人態度は、相互作用の初期には不安定なものであるが、やがて安定した傾向を示すようになる。こうした対人態度は、双方に形成されるのであるが、一般には双方の対人態度をセットしてみるときに対人関係という。しかし、その一方だけを取り上げてAのBに対する対人関係ということもある。なお、2人の関係が対等ではなく上下の関係を含む場合には、一方の者がより影響力をもちうるという次元が顕在化してきて、この次元がさらに対人関係に加味されることになる。この次元をとくに勢力関係（power relations）と呼んでいる。（長田 1996）

## 1 - 2 対象関係尺度（青年期用）

井梅、平井、馬場、青木が 2006 年に開発した青年期における対象関係（object relations）を評価する尺度である。対人関係を精神分析的な治療理論では対象関係という概念で扱う。対象関係とは「対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象（他者）との関係性の表象」である。対象関係は、現実の対人関係と密接に関わるものの、表面的にはさまざまな形をとって表れ、一見相容れない行動が併存することもあるなど、その関係は複雑である。

### —下位尺度—

- ①親和不全：対人的なやりとりにおいて、自ら壁を作り、緊張して打ち明けられない。深く付き合うことに恐れがある。
- ②不安定で希薄な対人関係：他者に対する評価が安定せず、相互理解やサポートの授受など実質的な中身を伴う対人交流ができない。
- ③自己中心性：自分が優れているという独善的な思いがあり、他者が動いてくれることを当然と考える。他者を操作的に利用しようとする。
- ④一体性の過剰希求：他者との心理的距離が過度に近く、自分の要求や行動が相手と 100% 共有されるはず（常に自分と同じ）だと思い、そのような相手を求める。
- ⑤見捨てられ不安：親しい人から拒絶され、取り残されることに対する恐れが強く、相手の反応に注意が向き、またそれに過敏である。

以上、5つの下位尺度、29項目から形成される。

### 1 - 3 依頼とは

依頼はだれもが日常で行う言語行動であるが、その表現のしかたにはさまざまな形式があることが知られている。

依頼とは話し手（依頼者）が聞き手（被依頼者）に何らかの行為の実行を発話によって求めることである。その際、依頼者はその行為の実行が自らにとって何らかの直接的な利益や状態の改善をもたらすものと認知している。

一般に、依頼の履行にともなって依頼者は利益（benefit）を得るが、被依頼者にはコスト（費用・損失）がかかる。そこで依頼者は、依頼内容や被依頼者との関係性といった状況に応じて、依頼にともなう被依頼者の負担を考慮し、彼らが否定的な感情を持たないように考慮を示そうとする。配慮を示す方法はさまざまであるが、依頼を丁寧に遂行することも一つの手段であると考えられる。依頼の丁寧さ（politeness）には、依頼表現における敬語の使用、付加表現の有無やその配置などが影響を与えるという。（中村ら 2004）

また、他者になんらかの働きかけを行い、他者に影響を与えることを「社会的影響力」という。これにはちょっとしたことを「依頼」する、人が考えを変えるように「説得」する、自分より地位の低い人に「指示」をしたり「命令」したりすることなどが含まれる。（今井 1996）

#### 1 - 4 五つの影響手段

依頼表現を大きく5つのパターンに分けたものである。

—五つの影響手段(今井 2006)—

- ① 単純依頼：受け手に行ってほしい依頼事項を単に伝える。
- ② 理由提示：依頼事項だけでなく、なぜ受け手に依頼、要請するのか、その理由や関連情報を提供する。
- ③ 資源提供：与え手が保持している資源(報償・罰・他者の支援等)を依頼事項に付加させる。
- ④ 正当要求：与え手と受け手との社会的役割関係や親密度、受け手が社会的規範に沿った行動をとることの必要性の指摘、強調をする。
- ⑤ 情動操作：依頼や要請をする前にあらかじめ受け手の気分や情動をポジティブな状態に変化させる。

⑥

## 第二章 先行研究

### 依頼表現における先行研究

岡本（1989）は依頼表現のバリエーションはどのように使い分けているのかを日本語の表現を中心に研究した。慣習的な形式の依頼表現を「～して」「～してください」「～していただけないでしょうか？」など、敬語の不使用や使用、疑問形などの間接的な形式に区分し、さらに補助動詞（くれる、くださる等）、終助詞（よ、なあ等）の諸形式などを細かく考えれば、バリエーションは極めて多様になると述べ、こうした表現形式の違いによって表現の印象（丁寧さ—ぞんざいさ、押しつけの弱さ—強さなど）に差異がもたらされると考えた。コストと依頼表現の関係を検討した結果、依頼相手との関係に加え、コストの大小によっても使い分けがみられた。

中村ら（2004）も依頼の履行にともなうコストが大きい場合より小さい場合の方が、被依頼者の承諾の程度が高かったと述べている。

## 第三章 調査

### 3-1 目的

対象関係の在り方と、使用する影響手段とその頻度に関するかどうかを検証することを本研究の目的とした。仮説は以下の通りである。

- ①親和不全は依頼自体が少ない
- ②自己中心性は依頼自体が多い
- ③自己中心性は情動操作を使用する

### 3-2 方法

2010年12月上旬に大学生114名（男性31名、女性83名）を対象に講義時間の一部をお借りして質問紙調査を行った。

### 3-3 質問紙構成

#### 1. 対象関係尺度

井梅ら（2006）によって開発された対象関係尺度（青年期用）を使用。この尺度は親和不全、希薄な対人関係、自己中心的な他者操作、一体性の過剰希求、見捨てられ不安の5因子で構成されている。これを「1:全くそう思わない」～「6:とてもそう思う」の6件法で回答を求めた。

#### 2. 五つの影響手段

依頼と説得の心理学（今井 2006）を参考に自分で依頼内容を簡単な作業・重労働の2通り作成し、それぞれ5項目の依頼表現を「1:まったく使わない」～「4:よく使う」の4件法で回答を求めた。

#### 3. フェイス項目

フェイス項目では性別、学科、学年、年齢の記入を求めた。

## 第四章 結果

調査対象者の基本属性は以下の通りである。

有効回答数 114部

性別 男性31人 女性83人

所属学科 社会福祉学科40人 実践心理学科62人 人間社会学科12人  
看護学部0人 コミュニティ政策学部0人

学年 1年生4人 2年生35人 3年生70人 4年生5人

年齢 18歳～25歳 (平均20.4歳)

18歳1人 19歳13人 20歳49人 21歳44人

22歳6人 25歳1人

#### 4-1 相関分析

対象関係尺度の5つ下位尺度の親和不全、不安定で希薄な対人関係、自己中心性、一体正の過剰希求、見捨てられ不安と、簡単作業、重労働で相関分析を行った。(表1)

表1 対象関係尺度の5つ下位尺度と簡単作業、重労働の相関関係 (n=114)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 親和不全							
② 不安定で希薄な対人関係	-0.6***						
③ 自己中心性	0.2*	-0.19*					
④ 一体性の過剰希求	0.02	0.29*	0.39***				
⑤ 見捨てられ不安	0.33**	0.04	0.1	0.4***			
⑥ 簡単作業	-0.05	-0.01	0.18	0.02	0.08		
⑦ 重労働	-0.08	0.07	0.18	0.09	.0.15	0.57***	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

親和不全は不安定で希薄な対人関係 ( $r=-.6, p<0.001$ ) と負の相関、見捨てられ不安 ( $r=.33, p<0.01$ ) と正の相関がみられた。

自己中心性は一体正の過剰希求 ( $r=.39, p<0.001$ ) と正の相関がみられた。

一体正の過剰希求は見捨てられ不安 ( $r=.4, p<0.001$ ) と正の相関がみられた。

簡単作業は重労働 ( $r=.57, p<0.001$ ) と相関がみられた。

対象関係尺度の5つ下位尺度と、5つの影響手段の単純依頼、理由提示、資源提供、正当要求、情動操作（簡単作業パターン）で相関分析を行った。（表2）

表2 対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（簡単作業パターン）の相関関係(n=114)

	単純依頼	理由提示	資源提供	正当要求	情動操作
親和不全	-0.07	0.05	-0.0007	-0.14	0.03
不安定で希薄な対人関係	0.03	-0.03	-0.07	0.09	-0.04
自己中心性	-0.07	-0.1	0.17	0.2*	0.26**
一体性の過剰希求	-0.04	-0.19*	0.018	0.16	0.09
見捨てられ不安	-0.06	-0.04	0.17	0.1	-0.0001

\* p < .05 \*\* p < .01

自己中心性と正当要求（ $r=.2$ ,  $p<.05$ ）、情動操作（ $r=0.26$ ,  $p<.01$ ）に正の相関が、一体性の過剰希求と理由提示（ $r=-.19$ ,  $p<.05$ ）に負の相関がみられた。

対象関係尺度の5つ下位尺度と、5つの影響手段の単純依頼、理由提示、資源提供、正当要求、情動操作（重労働パターン）で相関分析を行った。

（表3）

表3 対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（重労働パターン）の相関関係(n=114)

	単純依頼	理由提示	資源提供	正当要求	情動操作
親和不全	-0.20*	0.05	0.04	-0.16	0.01
不安定で希薄な対人関係	0.2*	-0.12	-0.03	0.15	0.03
自己中心性	0.01	-0.07	0.12	0.2*	0.17
一体性の過剰希求	0.24**	-0.12	-0.05	0.17	0.05
見捨てられ不安	0.11	0.04	0.07	0.1	0.1

\* p < .05    \*\* p < .01

親和不全と単純依頼（ $r=-0.2$ ,  $p<.05$ ）に負の相関がみられた。

不安定で希薄な対人関係と単純依頼（ $r=0.2$ ,  $p<.05$ ）、自己中心性と正当要求（ $r=0.2$ ,  $p<.05$ ）、一体性の過剰希求と単純依頼（ $r=0.24$ ,  $p<.01$ ）に正の相関がみられた。

#### 4-2 重回帰分析-ステップワイズ法-

1、対象関係尺度の5つ下位尺度の親和不全、不安定で希薄な対人関係、自己中心性、一体性の過剰希求、見捨てられ不安を独立変数、簡単作業パターンの5つの影響手段を従属変数として重回帰分析を行った。

- ① 従属変数が理由提示では F 値 4.42、決定係数  $R^2 = 0.03$  (n=114、 $p < .05$ )、一体性の過剰希求が -0.19 ( $p < .05$ ) で有意であった。
- ② 従属変数が資源提供では F 値 2.32、決定係数  $R^2 = 0.07$  (n=114、 $p > .05$ ) であったが、標準偏回帰係数は自己中心性が 0.23 ( $p < .05$ )、見捨てられ不安が 0.25 ( $p < .05$ ) で有意であった。
- ③ 従属変数が正当要求では F 値 4.02、決定係数  $R^2 = 0.09$  (n=114、 $p < .01$ )、標準偏回帰係数は親和不全が -0.24 ( $p < .05$ )、自己中心性が 0.23 ( $p < .05$ ) で有意であった。
- ④ 従属変数が情動操作では F 値 8.18、決定係数  $R^2 = 0.06$  (n=114、 $p < 0.01$ )、標準偏回帰係数は自己中心性が 0.26 ( $p < .01$ ) で有意であった。

2、対象関係尺度の5つ下位尺度の親和不全、不安定で希薄な対人関係、自己中心性、一体性の過剰希求、見捨てられ不安を独立変数、簡単作業パターンの5つの影響手段を従属変数として重回帰分析を行った。

- ① 従属変数が単純依頼では F 値 6.19、決定係数  $R^2 = 0.1$  (n=114、 $p < .01$ )、標準偏回帰係数は親和不全が -0.2 ( $p < .05$ )、一体性の過剰希求が 0.2 ( $p < .01$ ) で有意であった。
- ② 従属変数が正当要求では、F 値 4.49、決定係数  $R^2 = 0.1$  (n=114、 $p < .01$ )、標準偏回帰係数は親和不全が -0.26 ( $p < .01$ )、自己中心性が 0.24 ( $p < .05$ ) で有意であった。

## 第五章 考察

### －対象関係尺度の5つ下位尺度と、簡単作業、重労働の相関－

はっきりとした相関は得られなかったが、親和不全は簡単作業・重労働ともに相関係数に負の傾向が見られた。自己中心性は簡単作業・重労働ともに相関係数に正の傾向が見られた。仮説であった『親和不全は依頼自体が少ない』と『自己中心性は依頼自体が多い』は傾向があることはみることができた。

### －対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（簡単作業パターン）の相関－

自己中心性は正当要求と情動操作に相関がみられた。情動操作ではやや強めの相関が得られ、これは自己中心性の「他者を操作的に利用とする」という特性に沿った結果となった。ここで仮説の『自己中心性は情動操作を使用する』が立証された。

一体性の過剰要求では理由提示と負の相関がでており、これは他者が常に自分と同じだと思ふ傾向のある特性を象徴していると考えられる。

### －対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（重労働パターン）の相関－

自己中心性は正当要求と相関がみられた。自分が優れていると思ふ特性から自分の立場を利用する正当要求との相関が簡単作業パターンと同様にみられたのだと考える。

一体性の過剰要求では単純依頼に正の相関がみられ、上記と同様、他者が常に自分と同じだと思ふ傾向のある特性を象徴し、ストレートに依頼を伝える傾向がみられたのだと考える。

簡単作業パターンと重労働パターンの相関を比べてみると、従来の研究結果と同様に負担（コスト）の大小によって差がみられた。負担が大きいほど、依頼の使用数は減少傾向がみられ、被依頼者の負担が大きいと思われる作業ほど、依頼は避けられるのだと考えられた。

－対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（簡単作業パターン）の重回帰－

理由提示では一体性の過剰希求と負の有意がみられ、資源提供では自己中心性・見捨てられ不安が有意であり、正当要求は親和不全と自己中心性と有意であった。また、情動操作は自己中心性が有意だった。

－対象関係尺度の5つ下位尺度と5つの影響手段（重労働パターン）の重回帰－

単純依頼は親和不全と負の、一体性の過剰希求と正の有意がみられ、正当要求は親和不全に負の、自己中心性と正の有意であった。

これらの有意な偏回帰は相関分析を裏付ける結果となった。

## 結論

本研究では対象関係と依頼表現の関係性について大学生を対象に調査した。

依頼者は被依頼者に掛かると予想される負担が大きいほど、依頼をあまりしない傾向がはっきりとはないがみられた。これは中村ら（2004）の、依頼の履行にともなうコストの大きい場合より小さい場合の方が、被依頼者の承諾の程度が高かったという従来の研究を示唆する結果となった

また以下のことが明らかになった。

1. 親和不全は単純依頼をしない傾向がある。
2. 自己中心性は正当要求と情動操作をよく使用する。
3. 一体性の過剰希求は理由提示をせず、単純依頼をする傾向がある。

仮説の『親和不全は依頼自体が少ない』『自己中心性は依頼自体が多い』は、傾向はみられたものの、確実な結果を得ることはできなかったが、『自己中心性は情動操作を使用する』立証された。

強い相関をあまり得られなかったのは被調査者数が少なかったことがまず挙げられる。また、依頼項目の負担大小の基準についてはプレテストを実行し、依頼項目をより吟味して信頼性が強まれば、正確なデータが得られるのではないかと考えられる。

## 謝辞

幾度も尺度や依頼表現を試行錯誤し、途方に暮れていた時期もありました。想像以上に困難ばかりの卒業研究を、未熟なりにも書き終えることができ、今はとても安堵しています。

本研究に際して、お忙しい中様々なご指導を頂きました千葉先生に深謝いたします。また、調査の際に依頼を快く引き受けてくださった先生、協力して頂いた学生の皆様、そして共に励ましあい時には生き抜きに食事を楽しみ、また協力してくれた千葉ゼミの方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 要約

本研究では対象関係の在り方と、使用する影響手段とその頻度に関係があるかどうかを検証することを本研究の目的とした。質問紙の構成は、対象関係尺度（青年期用）と、五つの影響手段を負担大小に分けた簡単作業パターンと重労働パターンの2通り作成し使用した。

対象関係尺度の5つ下位尺度の親和不全、不安定で希薄な対人関係、自己中心性、一体正の過剰希求、見捨てられ不安と、簡単作業、重労働で相関分析、対象関係尺度の5つ下位尺度と、5つの影響手段の単純依頼、理由提示、資源提供、正当要求、情動操作で負担大小2パターンの相関分析を行い、対象関係尺度の5つ下位尺度を独立変数、簡単作業パターンの5つの影響手段を従属変数として重回帰分析を行った。

その結果、仮説の「親和不全は依頼自体が少ない」「自己中心性は依頼自体が多い」は傾向がみられたものの、有意であるとは認められなかった。「自己中心性は情動操作を使用する」は有意であると認められた。

全体を通して強い相関をあまり得られなかったのは被調査者数が少なかったことがまぎらげられる。また、依頼項目作成においてプレテストを実行し、依頼項目の信頼性を得れば、より正確なデータが得られるのではないかと考えられる。

## 文献

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子（2006）

日本における青年期用対人関係尺度の開発 パーソナリティ研究 pp181-193.

今井芳昭（2006） 依頼と説得の心理学 サイエンス社

岡本真一郎（1989） 依頼表現の使い分けの規定因

長田雅喜（1996） 対人関係の社会学 福村出版

中村真・阿久井香織（2004） 依頼表現の間接性に関する研究